



Title	<図書紹介>『比較文学叢書第三巻翻訳と近代化』
Author(s)	ヨコタ村上, 孝之
Citation	大阪大学言語文化学. 1993, 2, p. 138-139
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78185
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

亀井俊介編『比較文学叢書第三巻 翻訳と近代化』東京、中央公論社、1993年
刊行予定

内輪話で恐縮ですが（部外秘かも知れませんが）、日本で始めて大学に比較文学科を作った島田謹二先生の弟子で、学科の第一生である芳賀徹先生と平川祐弘先生が一昨年、東京大学を御退官になりました（ちなみに両先生は、少し年下の小堀先生とともに「シマキン・トリオ」と呼ばれていました）。そこで企画されたのが、両先生編集の2巻に他3巻と別冊を加えた『比較文学叢書』ですが、東大の定年は60歳なので、退官記念論文集でもあり *Festschrift* ということでもあるのだと思考します。紹介者が寄稿したのはその第三巻で、比較文学の主要な関心の一つである翻訳を取り扱っています。明治以降の日本文化は基本的に「翻訳」文化であり、西洋文化と日本文化の *confrontation*、*negotiation*、*cooptation* 等の過程であったと見られます。日本の場合はこれに「近代化」というやっかいな座標がさらに加わってくるので、その意味でこの巻は日本比較文学の固有の問題意識をすぐれて示したもののなのです。文学作品の翻訳の分析に寄稿論文は限定されているのだと想像しますが、翻訳研究は広く言語・文化の問題として会員の方にも必ずや興味深いものがあるでしょう。紹介者自身の論文は尾崎紅葉訳のトルストイを取り上げて、相変わらず恋がどうこう、セックスがどうこうとやってるものです。翻訳というものを異文化間での読書行為と捉えて、解釈学的な視点からその限界を論じる内容となっています。紅葉の訳は、トルストイが描く、邪悪な性欲の帰結としての妻殺しを、「あの遊治郎さえ現れなければあんな椿事（妻の姦通）は起らなかっただろうに」などと置き直して、とても楽しいものです。原作では妻が本当に不倫をしていたのかどうかはあいまいですから、この翻訳は異文化間のイデオロギー上の対立を表象するのみならず、階級としての女性と男性の対立も絡んできます。つまり、フェミニズム批評的な分析をすることもできるので、この作品（翻訳）がさまざまな批評の可能性に対して開かれていることが分ります。翻訳はどのような行為か、異文化パラダイムの理解はどう行われるか、男女関係とは何か、セックスとは何かなどといった問題に御関心のある諸兄（姉）

に御一読いただければ幸いです。(ヨコタ村上孝之)